

太陽と水の祇園祭

text by Shinji Ishii
文いししんじ

大分の日田に、リベルテ、という映画館がある。この春、そこで僕のドキュメンタリー映画の上映予定があり、せっかくなので日田を訪れ、朗読したり、お客さんと一緒に書いたり、焼酎を飲んで園子さんと腰ふりダンスでも披露しようか、と考えている。三月二十四日です。ご都合のよいかたは是非。

ところで日田といえば、2007年の夏に訪れて、住もうか、とおもった場所だ。信州の松本に五年住んで、家の賃貸契約が切れかけていたころ。松本は極寒の地であるので、次に住むんは、ぬくたいとこがええなあ、と園子さんと話していた。敬愛する先輩、画家の大竹伸朗さんの個展が閉幕する、というので、盛り上げ隊の一員として博多へ飛んだ。そして園子さんと三人で飲んで腰ふりダンスをした。博多に越す、という選択も魅力的だったが、あまりにも人気が高い場所だし、

園子さんも僕も「知る人ぞ知る土地と、運命的に巡りあいたい」というロマンチックな願望をもっていたので、博多は老後の楽しみにとっておくことにした。

翌朝、大竹さんは長崎へ向かい、僕は園子さん運転のレンタカーで大分へ向かった。温泉好きの園子さんが、ラムネ温泉、なる施設にいつてみたかったのである。

日田の市街に入る前、オンタ焼きの窯を訪ねた。小さな鹿の田、と書いて「小鹿田焼」と読む。

清らかなせせらぎの幾筋も走る、小さな村の地面に、巨大な木製の槌、「唐槌」の、鹿威しのような音が、カポーン、カポーン、と響いている。ひとの声。火が爆ぜる音。この槌で砕いた土を、小鹿田焼に使う。やわらかそうな色合いの肌、鹿の背の斑点みたいな細かな模様が刻まれる。園子さんは大皿を買い、僕は長細いコップ

を買った。その土地自体を分けてもらった感じがした。

そうして夕方、日田の市街、豆田町、というところに到着した。山に囲まれた土地に、黄金色の光がたまっていく。江戸時代は幕府の直轄地、つまり天領だった。大名相手に掛屋をいとなみ、気持にも懐にも余裕のある町人たちが、独自の文化を花開かせた。小鹿田焼ももとは、日田のひとたちが日常で使う食器のために作られたのである。

2007年7月17日の日記に、こうある。

「疎水沿いをえんえん歩く。軒先に造花がぐるんと引っかけてあるなど、大きな屋敷から掘っ立て小屋まで、ずいぶんきれいにあって、それも観光用というのでなく、自分の住んでいるところに伝わってきた流儀でやっていたら、そのままきれいになっている」

いつの間にか、園子さんも僕も、家探しモードの目つきで歩をすすめている。と、酒屋さんの前で、九州代表みたいなおばさんが、「いやーん」と叫び、園子さんの肩をずしずし叩いた。「こないに目えが悪なったんかと思たー」。園子さんがキョトン。おばさんは園子さんが手に持ったカーディガンを指さして「それ、服やねー、わたし今、それ犬かと思たんよー。こんな陽気なんに、ぬくいないんかしらー、て。アハハハ」

気候よりおばさんのほうが陽気だ。日中の陽の黄金色が、陽が沈んでからもつづく。外を歩いていると、空気がまるで、蒔絵を施した黒漆みたいに町ぜんたいをくるんでいる。おとなたちに長く愛でられてきた土地、というのがよくわかる。声にならない声が年月をこえてえんえん響き渡り、それが町の気配をかたちづくっている。

年に一度、祇園祭がひらかれる。四百年前京都を訪れた日田のひとが。祇園祭を見て、「あれ、うちでもやろや」ということになったのだそう。

九つの町会で、それぞれ一基ずつ山鉦をたて、囃子を鳴らして町じゅうを巡行

する。山鉦の一個一個が、人形、小物、

背景などで歌舞伎の演目をあらわしている。昔の若者やおっちゃん、婆ちゃん、子どもらも、まわってくるその山鉦を見あげては、歌舞伎の筋を話し、セリフを真似し、飛んだり跳ねたり、見栄を切ったりしたのである。

全身銀の泡につつまれるラムネ温泉からあがったあと、園子さんと、真剣に日田に住むのはどうか、と話しあった。水、というのが引越にあたって譲れない条件

だったが、ここ日田くらい水のいい土地は日本国内でもそうそうない。この地の水をのんで暮らし、この地の水に溶けて流れるのは、生物として理想だとおもっ

た。

ふたりとも両親が高齢で、いざというときすぐ駆けつけられるところ、ということもあって、松本から京都に越した。が、小京都ともいうべき日田へ、この三月、再訪する、というより、帰郷する感じさえあって、あの黄金色の空気に触れるのが、いまから楽しみでたまらない。園子さんにはまた、茶色くて紛らわしいカーディガンを、忘れずに携えていってもらおう。



大分県日田市



面積: 666.03km² (境界未定部分あり)
総人口: 63,887人 (推計人口2018年10月1日)
人口密度: 95.9/km²
市の木: サザンカ
市の花: アヤメ
市の鳥: セキレイ

Profile

1966年大阪生まれ。京都在住。著書に小説「ぶらんこ乗り」「麦ふみクーツエ」「ポーの話」「みずうみ」「四とそれ以上の国」など、エッセイ「人生を救え!」(町田康共著)「熊にみえて熊じゃない」「選い足の話」、絵本に「赤ずきん」(ほしよりこ絵)など多数。

